

令和7年度夏季特別展

「越前・若狭やきものの旅」

皆さんはやきものと聞くと何を思い浮かべるでしょうか。ご飯茶碗や皿、湯呑みは毎日の食卓に並ぶでしょうし、花瓶や茶器を思い浮かべる方もいるかもしれません。福井県は日本六古窯のひとつである越前窯を擁し、多彩なやきものの文化が花開く地です。本展では縄文時代から現代までを4部に分け、時代とともに移り変わりをさせるやきものの世界を紹介します。

1. 縄文時代から平安時代 土器の時代

本展の冒頭を飾るのは、縄文時代に生み出された土器です。土器の素材となる粘土は容易に採掘でき、可塑性(力を加えると形が変わる性質)や、加熱すると硬くなる性質があります。それらの性質を利用して生み出された土器は、人類が初めて化学反応を意識的に用いて作った道具だと言われています。土器の出現により、旧石器時代以来の「焼く」・「蒸す」に加え、「煮る」ことが可能になりました。煮ることにより、それまでは硬くて食べられなかったものを食べられるようになったほか、複数の食材を混ぜて調理することが可能になりました。土器は生きていく上で重要な食文化を大きく変化したのです。

若狭町に所在する鳥浜貝塚は全国的に著名な縄文遺跡として知られています。鳥浜貝塚からはおびただしい量の木製品や縄・かごなどの製品、そして多数の土器が出土しました。本展では、表面が帯状に赤く装飾された《赤彩土器》(国指定重要文化財(画像1))を展示します。実用性だけではなく美しさにもこだわった《赤彩土器》は鳥浜に暮らした縄文人の美意識を映し出しています。

縄文時代から古墳時代前期までのやきものは、野焼きと呼ばれる方法で焼成されてきました。野焼きは比較的簡単に土器を生産できる反面、800℃程度の低温焼成のため、粘土が焼き締まらずに水漏れしてしまいます。日本のやきものが進化するのは古墳時代中期のことでした。

古墳時代中期(4世紀末～5世紀初頭)、朝鮮半島から新たに須恵器と呼ばれるやきものがもたらされ、大阪府南部に所在する陶邑窯跡群で大量生産されました。須恵器は轆轤と穴窯という新技術を日本にもたらししました。轆轤は丸い器を大量生産するのに適しており、穴窯は1,100℃以上の高温で焼成するため、硬く水漏れしにくい製品ができあがります。轆轤と穴窯の導入によって日本のやきものは進化を遂げたのです。

福井県内では、6世紀初頭には現在の美浜町とあわら市で須恵器の生産が始まっていました。当初は古墳で



画像1 赤彩土器(縄文時代) 若狭町鳥浜貝塚出土(福井県立若狭歴史博物館蔵)
【国指定重要文化財】

の葬送儀礼に使われたほか、身分の高い人のみが使う器でした。7世紀後半になると各地で須恵器の生産体制が整えられたことで、食膳具として碗や皿が、貯蔵具として甕が広く使われるようになりました。須恵器の特徴のひとつに、形状の多様さがあります。画像2は越前市に所在する野中窯跡で発見された多口瓶です。多口瓶はその特異な形状に加え、寺院跡からの出土が多いことから清浄水の容器であると考えられています。須恵器には現在でも用途が解明されていない器種もあり、誰が・何のために・どのように使っていたか想像をめぐらすのも須恵器を鑑賞する際の楽しみ方のひとつです。

2. 中世から近世 越前窯の時代

福井県のやきものと聞くと、越前焼を思い浮かべる方が多いのではないのでしょうか。越前窯は平安時代末期(12世紀末)に常滑窯などの東海地方の窯業地から技術を導入して成立しました。壺・甕(画像3)・すり鉢といった生活必需品を主力製品とした越前窯は室町時代後期(16世紀代)に日本海側で最大の窯業地となり、その製品は現在の北海道から鳥取県までの日本海側で広く流通しました。本展では、北海道上ノ国町に所在する国史跡・勝山館跡から出土した古越前のすり鉢を里帰り展示します。古越前は福井市に所在する一乗谷

朝倉氏遺跡からも大量に出土し、中世都市に生きる人々の暮らしを支えていたことが明らかになっています。

増え続ける中世都市からの需要に対し、生産側はどのように応えていたのでしょうか。その答えは窯の改良にありました。越前町平等に所在する岳ノ谷1号窯は、国立歴史民俗博物館が昭和61、62年に実施した発掘調査によって発見された窯です。驚くべきはその窯体の大きさで、全長24メートル、最大幅6メートルにも及びます。鎌倉時代後期に操業していた水上1号窯は全長14メートル、最大幅2.6メートルで、岳ノ谷1号窯の容積は水上1号窯の約8倍にも及びます。長大な窯に炎を行きわたらせるため、窯の傾斜は最大で40度もの急傾斜となりました。また、越前町岩倉で産出する耐火度の高い軽石を窯内に用いることで窯の強度を高める工夫を行っていました。このような工夫により、一度の焼成で大量の製品を効率的に生産することができました。本展では、岳ノ谷窯跡の発掘調査で発見された資料を展示するほか、会期中の8月17日(日)には、一乗谷朝倉氏遺跡や岳ノ谷窯跡の発掘を指揮した小野正敏先生(福井県立一乗谷朝倉氏遺跡博物館特別館長)と、日本陶磁史研究の第一人者で岳ノ谷窯跡の発掘に参加した荒川正明先生(学習院大学文学部哲学科 教授)による特別対談を開催します。特別対談では、発掘当時の話や、一乗谷朝倉氏遺跡において越前窯製品が果た



画像2 多口瓶(奈良～平安時代) 越前市野中窯跡出土(個人蔵、当館保管)



画像3 大甕(室町時代)(当館蔵)

した役割、さらに日本人が壺に託したイメージなどをお話いただく予定です。

江戸時代に入ると備前窯の勢力拡大や有田窯を中心とする肥前諸窯の登場によって越前窯は販路縮小を余儀なくされます。この苦境に対し、越前焼生産組織は穴窯よりも少ない薪で焼成できる登り窯のぼりがまを導入することで、効率的な生産体制を整えました。また、赤土や灰釉かいゆう、藁灰釉わらばいゆうなどの釉薬を使用して水漏れを防ぐとともに、刻画文と線刻文による装飾を行って製品に付加価値を付与しました。さらに、食器や宗教用具など新器種の開発によって生き残りを図ります。越前窯が衰退したと言われている江戸時代こそ、新技術の導入により多種多様な製品が生み出された成長の時代だったと言えるでしょう。

3. 近代から現代 越前焼の時代

明治時代に入ると、福井県内でも色絵陶器の生産が本格化したほか、磁器の生産が試みられました。ここでは、明治から昭和にかけて県内各地に花開いた越前焼や、著名な作家を紹介します。

明治30年頃、越前町平等の吉田長兵衛(1860-1931)が設立した葵園は磁器の製造に成功し、食器や茶器・花器などを生産しました。同年、越前町小曾原おぞわらで山内伊右衛門が中心となって設立した合資会社日渉園にっしょうえんはアメリカへの輸出を目標として九谷焼や京焼風の絵付けで食器や茶器を生産しました。同じ頃、鯖江市日の出町では五十嵐小右衛門・堤丹治兄弟が新王山焼を創業し、手の込んだ食器や茶器などを生産していました。

これらの窯は独自性に優れた製品を生産していたものの、変わりゆく時代の中で短期間のうちに閉窯してしまいました。

昭和の福井を代表する作家に、塚原芥山かいざん(本名：正志、1907-1945)がいます。塚原芥山は現在の福井市豊島に生まれ、福井師範付属小学校で作文・図画・手工に秀でて神童と呼ばれていました。福井中学校卒業後、飛鳥組や福井新聞を転々とし、昭和5年から瀬戸の陶芸家加藤雲山、さらには日本を代表する陶芸家として知られる加藤唐九郎(1897-1985)に師事しました。塚原芥山は轆轤の技術に長け、その技術力は当時から話題でした。本展では芥山が唐九郎に影響を受けて制作した《志野茶碗》、さらに《蕎麦釉牛置物》(画像4)を展示します。《蕎麦釉牛置物》は芥山の作品では唯一の置物で、芥山の制作の幅広さを物語る貴重な作品です。

4. いまに生きる伝統

ここまで、縄文時代から昭和時代までのやきものを通観してきました。最終章は現代の越前焼を紹介します。今日、福井県内で約80名の越前焼作家が活躍しています。使いやすい形や今までにない独自の形を追求する人、自分だけの釉薬を追求する人、自分が感じたことや考えをオブジェの形態で発表する人など、おのおのが独自の哲学をもって制作しています。ここでは、多様性に富んだ越前焼産地の中から、伝統的な薪窯にこだわって制作する作家の作品の一部を展示します。

本展を通じ、身近で奥深いやきものの魅力に触れていただけると幸いです。



画像4 塚原芥山 蕎麦釉牛置物〔昭和時代〕(福井県陶芸館蔵)

令和3年度より、福井新聞に福井県の文化施設の職員が寄稿しています。福井県立歴史博物館の学芸員は、新聞に月に1回掲載される「歴史の扉」欄で、日々の調査の中での発見や展覧会の見どころなどを執筆しています。福井新聞社より「歴史の扉」の画像提供とご協力を得て、過去に掲載された「歴史の扉」を紹介させていただきます。

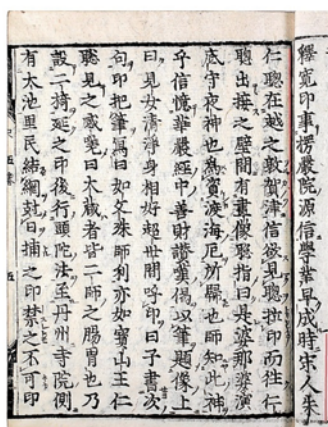
令和6年(2024年)5月25日(土曜日)

令和6年(2024年)6月22日(土曜日)

北陸新幹線延伸に伴って、全国放送のテレビでも福井、特に敦賀の特集を目にするようになりましたね。そこで今回は、平安時代の敦賀について館蔵品から探ってみましょう。



平安期の敦賀 異国交流



「元亨釈書」寛印の伝記(県立歴史博物館蔵)

取り上げるのは、鎌倉時代の禅僧、関西の僧侶、著した「元亨釈書」です。これは仏教伝来から約700余年間にわたる日本仏教の歴史を記した書物です。本書には、僧侶の伝記も載っています。福井県ゆかりの人物も登場します。画像は、平安時代中ごろ(10世紀末)の天台宗の僧、寛印の伝記です。その内容は、寛印が師匠である源信とと

もに、宋(当時の中国)からやってきた朱仁聡なる人物と面会した時のエピソードを通して、寛印が仏教の経典をよく記憶し内容を深く理解していたことを紹介するものです。その面会の場所が「越の敦賀の津」(現在の敦賀湾)なのです。朱仁聡の来日後の動向は、当時の貴族の日記等に記されています。彼が敦賀に滞在したのは長徳元年(995年)9月から長徳2年ごろです。来日の報は京都、ほどなく寛印たちのいた延暦寺にも伝わり、先の面会が実現したのでしょう。



今回の寄稿は…

酒井健治さん

(文化財調査員・歴史学)

長徳2年には、越前国を治める国司として、漢詩の名手であった藤原為時が赴任しました。為時は「源氏物語」の作者、紫式部の父親です。当時の漢詩集には、為時が宋人に贈った漢詩が伝わります。漢詩は異国人と交流するための手段でしたから、越前に赴任した際に、滞在していた朱仁聡たちに贈った漢詩ではないでしょうか。そのほ

6月下旬。福井では、毎年この時期に「福井地震」が取り上げられます。「歴史の扉」でも、昨年、令和5年(2023年)が福井地震の発生から75年の節目の年だったこともあり、その被害と



福井地震 今起きたら



福井地震後の福井市街地=1948年6月29日撮影(国土地理院ウェブサイト) 地図・空中写真閲覧サービスから加工

復興について紹介しました。その時は、令和6年6月は違う内容にしようと思っていた。しかし、今年の元旦、石川県能登地方を震度7の地震が襲いました。津波と火災も発生し、大きな被害をもたらしました。福井県嶺北地方でも、震度5強の揺れにより被害が出ています。さらに6月3日の早朝にも能登地方で震度5強が観測されました。こうしたことから、今年も「福井地震」をテーマに書くことにしました。改めて振り返りましょう。福井地震は、昭和23年(1948年)6月28日の夕刻、現在の坂井市丸岡町付近を震源として発生し、当時としては最大の震度6を記録しました。多数の家屋が倒壊し、福井駅周辺、松岡町、丸岡町、金津町といった市街地で火災が起き、被害が拡大しました。7月25日には、地震で損壊した丸岡川の堤防が中藤島村(現福井市)付近で決壊し、大規模な洪水が起きました。現在、こうした被害のようすについて、インターネット上に多くの情報が公開されています。たとえば、国土地理院の地図・空中写真閲覧サービス



今回の寄稿は…

瓜生由起

(総括学芸員)

(中近世石造物)

ス (<https://www.gsi.go.jp/>)では、福井地震直後の航空写真で被害の状況を見ることが出来ます。また、県や市の図書館・博物館、新聞社、米国の雑誌社のサイト等でも記録写真が公開されていますので、ぜひ閲覧してみてください。そして、過去として受け取るだけでなく、「現在」と重ね合わせて見てか。

令和6年(2024年)7月27日(土曜日)

令和6年(2024年)9月14日(土曜日)

以前、初代福井藩主の結城秀康を紹介したことを覚えていますか。秀康は「天下人」徳川家康の子ともですが、二回も養子に出され、家康に冷遇されたとも言われています。しかし、良質な資料では家康の内心までは



信頼されていた秀康



徳川秀忠書状の複製(県立歴史博物館蔵、原本は大阪城天守閣蔵)

分らず、秀康の養子入りはあくまで当時の政治的駆け引きで決まったものであったと指摘しました。今回は、結城家へ養子に入った秀康が、家康からむしろ信頼されていた点を見ていきます。一般的にあまり知られていない資料として、慶長4年(1599年)3月22日付で、弟の秀忠が秀康へ出した手紙(大阪城天守閣所蔵)が残っています。これには、家康が当時の政権の最高幹部である「六人」(いわゆる五大老、もしくはそれに準ずる地位への追加)に秀康を推挙したと記されており、



今回の寄稿は:
大河内勇介学芸員
(日本中世史)

て、越前の統治を進め、福井藩の礎を築きました。また、上方の伏見城に在城することも多く、公家や西国諸大名との交渉を行いました。こうした点からも、秀康が徳川政権樹立の過程で重要な役割を果たしていたことが見て取れます。しかし慶長12年、病气により、惜しくも34歳の若さでこの世を去りました。こうして、家康

お寺には正面の入り口に、「山門」という建物を構える場合があります。永平寺にも山門があり、その二階部分に仏像がまつられています。永平寺は鎌倉時代に道



羅漢 表情さまざま



元というお坊さんが開きました。現在の山門は火災にあった後、江戸時代に建て直され、永平寺の中でも古い建物として今に伝わっています。今回紹介するのは、永平寺山門の上にある仏像のうち、十六羅漢とい

う像です。写真、羅漢の中には、老いた姿の像も若い姿のものもあり、また表情や動きも像によってさまざまです。写真の像は眉を吊り上げ、怒りに満ちた表情をしています。特に片手を振り上げるポーズは珍しく、動きの勢いの良さが見てとれます。それでは、これらの像はいっ、だれが造ったのでしょうか? 像を造っ



今回の寄稿は:
高口柚学芸員
(美術工芸)

た記録や他の像との比較から、山門の建て直したに合わせて、江戸時代に「慶」という職人によって造られたと考えられます。像の出来栄を見るとき、職人の腕の良さが伝わってきます。このほか500躯を超える五百羅漢像など、山門上には多くの仏像がまつられています。福井県立歴史博物館で

福井県立歴史博物館には、様々な専門の学芸員がおり、日々、資料整理や調査研究、展覧会、講座などの仕事をしています。『ふくいミュージアム』No.71・72の全2回に分けて、当館の学芸員8人をご紹介します。本号では、4月から加わった新たな3人を含む4人をご紹介します。



副館長(調査研究)

かわごし

みつひろ

川越 光洋

専門：考古学
文化財保存科学

【自己紹介】

令和7年4月に歴史博物館の調査研究部門の副館長として配属されました。私は約30年ぶりにこの博物館に戻ってきました。現在の歴史博物館は以前より、さらに膨大な史資料が収集・保管されており、驚いています。これらの貴重な文化財を公開し、福井県の風土や文化、歴史を広く伝えたいと思います。また、各地域の名所、祭礼行事、そして特色ある博物館施設に導けるような交流の交差点となり、開かれた県内博物館の中核施設としての性格を併せ持っています。どうぞ、よろしくお願い申し上げます。

【これまでの活動】

この歴史博物館の前身、県立博物館には恐竜骨格や猿人模型、福井の自然が展示されていたことをご存じでしょうか。当時は自然分野に配属していました。勝山市北谷や中国内モンゴル自治区での恐竜化石調査にも携わりましたし、現在の恐竜博物館の中でいうところの「人類の歴史」の展示を担っていました。

その後は県教育庁埋蔵文化財調査センターや県立一乗谷朝倉氏遺跡博物館で調査研究してきました。特に新たな一乗谷の博物館“あさみゅー”での開館業務は感慨深いものがあります。



一乗谷城を案内する様子



主査(学芸員)

いちのせ

りょう

一瀬 諒

美術史学
専門：日本陶磁史

【自己紹介】

日本におけるやきものの歴史を研究しています。日々の暮らしの中で使われるやきものには、作り手の理想と使い手の美意識が潜んでいます。時代とともに、やきものがどのように変化していったのか、どのような役割を与えられてきたのかを読み解くことで、世界有数のやきもの文化を生み出した日本の社会や風土、その中で暮らしてきた人々の喜びを知ることができると思っています。



越前焼の窯焚きに参加し、薪を入れることもあります

【これまでの活動】

- 福井県陶芸館 令和4年6月25日～8月21日
「近世の福井を彩ったやきもの」
- 越前焼研究の第一人者であった水野九右衛門氏の古民家と資料館を越前陶芸村に移築、水野氏の越前焼コレクションを展示する越前古窯博物館の開館に携わりました。



主査(学芸員)

はしもと ひろき
橋本 紘希

歴史

専門：日本近現代史

【自己紹介】

令和5年(2023)に県庁文化課に異動になって以来、2年ぶりの歴史博物館復帰です。再び福井県の歴史について、皆様にお伝えすることができる環境に身を置くことができ、大変嬉しく思っています。専門は明治から現代までの比較的新しい時代です。今身の回りにあるありふれたものでも、何十年、何百年も経つと、それは歴史の資料となっていきます。「これは珍しいものではない」と思われても、実は福井の歴史を知る上で貴重な資料となることもありますので、どうか捨てる前にお声がけ下さい。

【これまでの活動】

- 福井県立歴史博物館 令和2年度特別展
令和2年10月24日～11月29日
「皇室とふくい―行幸・行啓の記録と記憶」
- 福井県立歴史博物館 令和4年度特別展
令和4年10月22日～11月27日
「百貨店の近代～文化と娯楽の花咲くところ～」
- その他、県内の近現代資料の調査や保存に取り組んでいます。



特別展「百貨店の近代」の展示



学芸員

にし お えいの すけ
西尾 栄之助

民俗

専門：無形民俗

【自己紹介】

祭りやそれを実践する人々の営みなど、さまざまな地域で伝承されてきた文化を研究しています。はるか過去から現在までの時空を貫き、連綿と伝承されてきた文化には、私たち日本人の根幹となる心性が潜在しています。そんな民俗文化を研究することで、自分たち自身のことを知り、以てみなさんが未来を考える際の一助になればと存じます。



西津七年祭（福井県小浜市、令和7年5月4日）

【これまでの活動】

令和7年3月までは奈良県立民俗博物館で学芸員をしていました。また出身は静岡県で、これまでは奈良県、京都府、南アフリカ共和国に住んだことがあります。浅学菲才で福井県のことはまだまだ勉強中の身ですが、精一杯に精進いたしますので、どうぞよろしくお願いいたします。



吐山の太鼓踊り（奈良県奈良市、令和6年11月23日）

ふくい歴博講座を実施しました！

〔テ ー マ〕「江戸時代の農業と景観
～越前国を中心に～」

〔日 時〕令和7年4月19日(土)
14:00～15:30

〔講 師〕伊藤大生(当館学芸員)

〔参加人数〕104人

現在と違い、機械がなかった江戸時代の農業の様子やそれを反映した景観について紹介しました。



講座の様子

常設展示の一部を展示替えしました！

令和7年5月1日より
歴史ゾーン「越前刀」コーナーを入れ替えました。

刀 江戸時代 当館蔵

〈銘〉表：近江守藤原継広

裏：越前住下坂

脇指 江戸時代 当館蔵

〈銘〉表：越前住播磨大掾藤原重高

越前住伯耆守藤原汎隆

裏：越前住下坂 近江守藤原継広



「越前刀」コーナー

写真展のお知らせ

令和7年6月12日(木)～8月31日(日)

※会期中休館日 6月25日(水)・7月9日(水)・

7月16日(水)～18日(金)

「福井空襲80年
～記録写真で振り返る～」

1F エントランスギャラリー

観覧料：入館料(一般100円、高校生以下・
70歳以上の方無料)のみでご覧になれます。



焼夷弾の着弾による火災

7月～8月の催し物案内

夏季特別展

「越前・若狭やきものの旅」

開催期間：令和7年7月19日(土)～8月31日(日)

※会期中無休

観 覧 料：一般400円 大学・高校生300円

小中学生・70歳以上の方200円

※20名以上の団体は2割引

※会期・内容は、予告なく変更される場合があります。

公式サイトなどで最新の情報をご確認の上、ご来館くださ
いますようお願い申し上げます。

担当学芸員による「ふくい歴博講座」

8月3日(日) 14:00～15:30

定員：160名 1F 講堂にて

※7月3日(木)より電話(0776-22-4675)で

事前申し込み

越前焼工業協同組合による特設ショップ

8月2日(土)、3日(日)

※作家によるワークショップも同時開催